

多彩な人的ネットワークの中から紡ぎ出した 学際的な研究と教育

同志社大学名誉教授 太田進一

(インタビュアー) 藤川 健

兵庫県立大学国際商経学部准教授



太田進一 (おおた しんいち)

1942年生まれ。兵庫県神戸市出身。
同志社大学商学部名誉教授。博士(商学)(同志社大学)。1965年同志社大学商学部卒業、1968年同志社大学大学院商学研究科修士課程修了。同年、大阪府立商工経済研究所勤務、主任研究員を経て、1980年同志社大学商学部専任講師、1981年同助教授、1988年同教授。2013年定年退職。

専攻は、中小企業経営論、ネットワーク経営論など。

主な単著書に、『中小企業の比較研究』(中央経済社、1987年)、「ネットワークと中小企業」(晃洋書房、2012年)など。

日本中小企業学会第11期副会長、日本経営学会元理事、アジア経営学会元理事、関西ベンチャービジネス学会元常任理事など。

藤川健(以下、藤川) 本日は商工総合研究所の機関誌『商工金融』企画、著名な中小企業研究者の「想い」と「役割」をうかがう第5回目のインタビューとして、同志社大学名誉教授の太田進一先生にお越し頂きました。どうぞ宜しくお願い致します。

1 中小企業に対する関心の芽生え

藤川 先生は神戸市で生まれ、兵庫高校を卒業された後、同志社大学商学部、商学研究科に進学されておられます。どのように学生生活を過ごされていたのでしょうか。

太田進一(以下、太田) 中学と高校は剣道部

に所属しており、中学・高校共に団体戦で県大会・近畿大会に優勝しました。いわゆるスポーツ少年でした。私が中学と高校の団体戦で担っていたのは先鋒です。先鋒は五人制の中で最初に試合をするため、場の雰囲気作りを行う役割を果たし、勝たなければならないので大変でした。他の部員からは元気がいい、ガッツのあるやつと思われていたのかもしれませんが、私は背が低かったため、上背のある人が一発で



試合を決める「飛び込み面」の成功率が3割程度と低く、小手と面の二段打ち、引き際の胴や面で勝負していました。このような「飛び込み面」の成功率の低さから、大学での剣道部の活動を諦めました。そして、入学した同志社大学では、剣道部からの入部の誘いもありましたが、勉強に打ち込もうと考え、E.S.Sと「中小企業研究会」に入会しました。入学して早々に「中小企業研究会」に入会したのは父の影響からです。貿易関係の仕事をしていた父は、疎開先で従業員を雇用して松根油¹や、炭団と練炭の製造を始めました。また、当時はその町になかった本屋やパン屋も営んでいました。今日で言う「多角化経営」ですね。その後、父が疎開先から神戸へ戻り、紙器製造業を開業しました。私は小学校から家業を手伝うようになり、小零細企業を経営する父を間近で見っていました。当時を振り返ると、小切手の裏書の書き方や台風手形²の仕組みを知っているませた小学生だったと思います。そして、子供ながらに、なぜ中

小企業は経営が上手くいかないのだろうか。沢山ある中小企業が世の中でどういう役割を果たしているのかという素朴な疑問を感じていました。それが、大学で「中小企業研究会」に入会したきっかけです。「中小企業研究会」では、1年次から「渉外」の役員となり、早稲田大学の「中小企業研究会」との交流の折

衝を行い、お互いの学園祭での相互交流、夏季休暇中の合同合宿研究会などを実現しました。また、「中小企業研究会」の活動を通じ、先輩方からマルクス経済学と近代経済学の基礎を学びました。例えば、マルクス経済学では、岩波文庫から出ていたマルクス・エンゲルスに関する初歩的な入門書、近代経済学では、熊谷尚夫氏の『現代経済学入門』や篠原三代平氏・林栄夫氏・宮崎義一氏が編集した『近代経済学講座—基礎理論篇』のシリーズなどを勉強しました。さらに、中小企業関係の文献では、楫西光速氏・岩男裕純氏・小林義雄氏・伊東岱吉氏が編集した『講座 中小企業』（全4巻）を読んだのも覚えています。

② 師と友に恵まれた大学・大学院生時代

藤川 先生は学部で前川恭一先生³、大学院で竹林庄太郎⁴先生のゼミを選ばれています。そこではどのようなことを学ばれたのでしょうか。

太田 大学院で指導して頂いた竹林先生は、

1 松の切り株を低温で乾溜して作る油のこと。

2 約束手形の一つであり、手形のサイトが210日であるものを指す。名前の由来は古来より春分の日から210日前後が台風の襲来日であることが広く知られていたことによる。

3 前川恭一（まえかわ きょういち：1930～1998）同志社大学元教授。

4 竹林庄太郎（たけばやし しょうたろう：1906～1991）同志社大学名誉教授。

「中小企業研究会」の顧問でした。それに対し、学部でお世話になった前川先生との出会いは偶然でした。大学の2回生の時に、「中小企業研究会」の渉外として、大阪経済大学の学長兼理事長であった藤田敬三⁵先生を講演会の講師としてお招きしました。その講演会の時に藤田先生の隣に座っておられたのが前川先生でした。前川先生の博士前期課程の指導教授が藤田先生だったようです。ちょうど2回生の終わりのゼミ選考の際に、3回生からのゼミナールの先生を竹林先生にしようと考えていました。ところが、竹林先生は私が3回生の時に国内研究でゼミを募集しないということだったので、希望を急遽、前川先生に変更しました。前川先生から学ぼうちに、4年間で卒業することになんとか抵抗を感じ、もう少し勉強したくなりました。そこで、大学院に入り、修士課程で竹林先生の指導を受けました。中小商業を中心に多様な研究業績をお持ちの竹林先生のもとで



色々な勉強をさせてもらいました。毎週、社会科学の本だけではなく、物理学、化学、生物学などの自然科学の本を指定されて報告しました。竹林先生の指導の根底には、社会科学と自然科学の批判であったエンゲルスの『反デューリング論』の影響がありました。当時はこれが修士論文とどのように繋がるのだろうか疑問に思うことも多々ありました。しかし、今振り返ってみれば、修士課程で門外漢の学問領域に戸惑いながらも取り組んだ経験が、後の機械工学、電気工学、電子工学、情報工学の知識を融合した学際的・複合的なメカトロニクスなどの最先端の分野に関心を持って研究することに繋がったのだと思います。また、大学院生時代には、商学研究科の院生仲間と「資本論研究会」を作りました。週1回程度でしたが、『資本論』の翻訳書とドイツ語の原典の両方を揃え、チューターには当時、経済学部の助手であった島一郎⁶先生に来て頂いて勉強しました。研究会では、仲田正幾⁷さん、田中隆雄⁸さん、中村宏治⁹さん、渡辺峻¹⁰さんなどの専攻の異なる院生同士でよく議論したものです。たしか文学部社会学科（現社会学部）や経済学部の大学院生も参加していたように思います。

3 研究者人生のはじまり

藤川 先生は商学研究科の修士を修了された後、大阪府立商工経済研究所に就職されまし

5 藤田敬三（ふじた けいぞう：1894～1985）元大阪経済大学学長。大阪市立大学名誉教授。

6 島 一郎（しま いちろう：1937～2009）同志社大学経済学部名誉教授。

7 仲田正幾（なかた まさき：1942～）立命館大学名誉教授。

8 田中隆雄（たなか たかお：1941～2006）青山学院大学元教授。

9 中村宏治（なかむら こうじ：1943～）同志社大学名誉教授。

10 渡辺 峻（わたなべ たかし：1944～）立命館大学名誉教授。



た。そこではどのようなことをされていたのでしょうか。

太田 私は「中小企業研究会」で毎年行う実態調査の企画も担当していました。実態調査では、京都の地場産業に対する聞き取り調査や、創業して間が無いダイエーの来店客へのアンケート調査を実施しました。そのような体験で得た実態調査の重要性や面白さから、大学院修了後は中小企業に関する調査・研究の仕事をしたと考えていました。また、「中小企業研究会」の先輩の父親が大阪府立商工経済研究所で活躍されていたことも就職する大きなきっかけになりました。ただ、一人っ子にもかかわらず、快く大学院まで進学を認めてくれた父は、修了後に家業を継ぐものと考えていました。それが相当ショックだったのか、父は私が就職してすぐに事業を辞めてしまいました。話を戻しますが、12年間働いた大阪府立商工経済研究所では、週に一度、高田亮爾¹¹さんや村社隆¹²さんなどと研究会を行っていました。ここでは、アダムスミスの『国富論』、リカードの『経済学および課税の原理』、ヒルファディングの『金

融資本論』などの主に貿易論や開発経済学の基礎的な文献を輪読していました。また、仕事の面では、関西で地盤の強かった繊維産業を中心に調査研究を担当し、年度ごとに調査レポートを発表していました。しかし、私たち研究員は、繊維だけではなく、雑貨や家電などの他の産業の調査・研究も必要であるとの認識が強かったので、例えば、高田さんと2人で、電気・機械産業の下請制についての調査研究を行ったりもしました。これをもとに、『家電下請』における技術水準の階層性』というタイトルで初めて日本中小企業学会の統一論題報告を行いました¹³。さらに、中小企業のメカトロニクス化などの新しい現象にも注目して、調査・研究を進め始めたのもこの頃です。また、商工経済研究所に在職中の1977年には、経済企画庁調査局内国調査課へ出向しました。内国調査課での1年間の勤務は、研修という名目でしたが、実態は出向でした。経済白書、年間経済回顧、月例経済報告、経済企画庁長官の国会での予想問答集の作成などの様々な仕事に従事しました。その1年間は国際経済班に所属し、当時の通産省（現在の経済産業省）から出向していた班長、もう1名の班員と私の3名で仕事をしていました。主に内国経済調査課長が使う国際経済関係の資料の準備や、巻末の「中小企業」「貿易」などの欄の文章を作成しました。出向中は、普段出会わないような方と知り合いになることもありました。今ではいい思い出です。

11 高田亮爾（たかだ りょうじ：1943～）流通科学大学名誉教授。日本中小企業学会第11期会長。

12 村社 隆（むらこそ たかし：1944～）福山平成大学元教授。

13 太田進一（1983）『「家電下請」における技術水準の階層性』日本中小企業学会編『技術と中小企業』同友館。

4 中小企業の比較研究

藤川 先生は1980年に同志社大学商学部に移動した後、1987年に商工総合研究所の中小企業研究奨励賞を受賞した『中小企業の比較研究』を出版されました。どのような問題意識に基づいて執筆されたのでしょうか。

太田 『中小企業の比較研究』¹⁴は、過去の下請制の諸議論を念頭に置きながら、産業比較（技術革新）、地域比較（地場産業）、国際比較（ヨーロッパ）という3つのパートから構成されています。これは修士論文で整理した下請制・企業系列の論争＝藤田・小宮山論争と藤田・小林論争がきっかけになっています。それぞれの論争がかみ合っていないのは、各々が自己の問題意識に基づいていたからだと考えました。すなわち、藤田先生は、関西の繊維産業や機械工業などを対象とし、下請制の商業的支配が色濃く残っていることを強調しておられました。他方で、小宮山先生は、当時、すでに発展していた京浜工業地帯の機械工業を対象とし、下請制が近代的なものであるとして理論化されました。つまり、両氏の研究対象の産業や地域は異なっており、それが議論に色濃く反映されていた。そして、このような下請制を巡る論争があったため、藤田・小林論争において、藤田先生は他の研究者による批判を意識し、下請制での遅れと異なる系列制の近代性を主張されまし

た。逆に小林先生は、下請制と系列制が本質的に同じであるとされ、結果的に系列制の遅れを指摘されました。このように、論争の対象である、産業や地域を同じくして比較しないとズレが生じることになります。さらに、下請制や系列制は、欧米でも subcontracting として古くから見られた現象であり、日本と異なる形で発展を遂げていました。したがって、国際比較によって、このような日本と欧米の下請制の異同も分析する必要があると考えたからです。これらの問題意識から、私は拙著を上記の3部の構成として執筆しました。

5 イギリスでの出会い

藤川 先生はまた、1986年から1987年までの1年間、英国サセックス大学科学政策研究所（以下、SPRU）に留学されました。どのようなことがきっかけでSPRUに行かれたのでしょうか。

太田 SPRUに行ったのは、R. ロスウエル¹⁵・W. ゼクヘルト¹⁶共著の翻訳書『技術革新と中小企業』¹⁷を問亭谷努¹⁸さん、庄谷邦幸¹⁹さん、岩田勲²⁰さん、太田の共訳で出版しようとしていたことが契機でした。物理学出身という異質なバックグラウンドをお持ちのロスウエル教授に保証人になって頂き、身分は Visiting Fellow で1年間SPRUに滞在しました。SPRUでは、週1回の研究会へ参加して討論を行い、日本の自動車や電気産業のイノベーションに関する英

14 太田進一（1987）『中小企業の比較研究』中央経済社（1987年度中小企業研究奨励賞受賞）。

15 R. ロスウエル（Roy Rothwell）応用物理学博士であり、イノベーション・マネジメント論専攻。サセックス大学科学政策研究所（SPRU）元主任研究員。

16 W. ゼクヘルト（Walter Zegveld）機械工学博士であり、イノベーション政策論専攻。オランダ応用科学研究機構（TNO）元政策研究・情報部長。

17 Roy Rothwell, Walter Zegveld（1982）*Innovation and the Small and Medium Sized Firm*. London: Frances Pinter（問亭谷努・岩田勲・庄谷邦幸・太田進一訳（1987）『技術革新と中小企業』有斐閣）

18 問亭谷努（まおたに つとむ：1934～2002）奈良産業大学（現奈良学園大学）元教授。

19 庄谷邦幸（しょうや くにゆき：1931～）桃山学院大学名誉教授。

20 岩田勲（いわた いさお：1935～1987）福岡大学元教授。

語論文1本をSPRUに提出しました。また、SPRUでは後に『ニュー・イノベーション・プロセス』²¹として翻訳を手掛けたM. ドジソン²²さんとの出会いもありました。ドジソンさんはロスウエル教授の共同研究室におられ、研究テーマが中小企業のメカトロニクス、CAD/CAM、中小企業の技術革新であったこともあり、私の研究テーマと近かったので仲良くなりました。さらに、当時ロンドン大学で講師をされていた酒向真理²³さんは、酒向さんの旦那さんとドジソンさんが友人同士であることから知り合いになりました。そして、酒向さんには中小企業のプリント基板工場などのインタビュー調査に連れて行ってもらいました。ちょうど、三井逸友²⁴さんや渡辺幸男²⁵さんも同じ時期に在外研究でロンドンにおられたので、一緒に酒向さんとの調査を行いました。また、三井さんと渡辺さんとは、ロンドン大学で開催された国際中小企業会議（International Small Business Congress）にも参加しました。下請制の解釈の違いを巡って議論した三井さんと渡辺さんですが、彼らからも非常に大きな研究上の刺激を受けました²⁶。当時のことをお話するなかで、イギリスで渡辺さんから小型のテレビと炊飯器を譲ってもらったことを思い出しました。



⑥ 中小企業の情報化研究

藤川 先生はロンドンから帰国後、英国の中小企業に関するご研究も発表されておられますが、主に情報化などの技術革新に関するご研究が多くを占めるようになり、その成果を2012年に『ネットワークと中小企業』としてまとめられました。

太田 SPRUから戻ってきた私は、仮説として、IT化などのイノベーションが大企業と中小企業との格差を縮小するのではないかとの考えを強く持ちました。それがきっかけで中小企業の情報化の研究に本格的に取り組むようになりました。また、大阪府被服工業組合からの依頼で、被服産業の情報化の調査を行ったことも関係しています。しかし、情報化の実態調査や研究を

21 Mark Dodgson, David Gann, and Ammon Salter (2005) *Think, Play, Do*. Oxford University Press (太田進一監訳・企業政策研究会訳 (2008) 『ニュー・イノベーション・プロセス』 見洋書房)

22 M. ドジソン (Mark Dodgson) イノベーション・マネジメント論・イノベーション政策論専攻。サセックス大学科学政策研究所 (SPRU) シニアフェロー、オーストラリア国立大学経営大学院教授を経て、クイーンズランド大学ビジネススクール名誉教授。

23 酒向真理 (さこ まり：1960～) オックスフォード大学ビジネススクール教授。

24 三井逸友 (みつい いつとも：1947～) 横浜国立大学名誉教授。日本中小企業学会第10期会長。

25 渡辺幸男 (わたなべ ゆきお：1948～) 慶應義塾大学名誉教授。日本中小企業学会第9期会長。

26 下請制の解釈の違いについては、太田進一 (1986) 「中小企業の総合的比較研究の定義 (2)」『同志社商学』第38巻第2号を参照されたい。

進めるうちに、中小企業の生産性や効率性は高まったものの、大企業との格差は依然として存在していることに気付きました。しかし、今でも中小企業が発展するためには、IT化を進める意義はあると考えています。そのような、広く捉えると技術革新の研究は、編著書である『技術革新と産業社会』²⁷や、統一論題を過去に6度経験した日本中小企業学会の学会誌などを通じて断片的に発表してきました。そして、一連の研究成果をベースにまとめたものが、『ネットワークと中小企業』²⁸です。本書を新たに執筆し直した背景にあるのは、1990年代以降の日本の国際競争力の相対的な低下です。そのような大企業と中小企業の国際競争力の低下の原因は、主にIT化などのイノベーションの立ち遅れと、中国などの発展途上国の台頭の2つからもたらされていると考えています。商工経済研究所で担当していた繊維産業を例に挙げれば、中国や韓国の工場では日本で開発された最先端の織機がかなりのスピードで導入されま



27 太田進一編著（1994）『技術革新と産業社会』中央経済社。

28 太田進一（2012）『ネットワークと中小企業』見洋書房。

29 関西中小企業研究会は、1966年から始まった関西を中心とした若手の中小企業研究者が研鑽を図る場であり、大阪市立大学・大阪経済大学名誉教授の藤田敬三氏が初代会長、大阪市立大学名誉教授の巽信晴氏が二代目会長、大阪経済大学名誉教授の高城寛氏が三代目会長を務めた。暫くして、関西中小企業研究会は、日本中小企業学会西部部会にその役割を任せ、2002年に解散された。詳しくは、太田進一・庄谷邦幸・高田克爾・田中充「2013」『中小企業・経営研究所 開所50周年記念座談会』『経営経済』（大阪経済大学）第49号を参照されたい。

した。それに対し、日本の工場は減価償却が終わった古い設備がそのまま設置されているのを目の当たりにしました。このような危機意識もあり、私は『ネットワークと中小企業』で、日本の国際競争力を高めるための中小企業の情報化の遅れをどのように克服すればよいのかを検討しました。もちろん、中小企業のIT化を推進するためには、中小企業そのものがネットワーク化する共同化や組織化もそれに寄与すると信じています。

7 学会での活動

藤川 先生は、高田会長の下、日本中小企業学会第11期（2010.11～2013.10）の副会長も務めていらっしゃいます。

太田 大阪府立商工経済研究所で1年先輩の高田さんを日本中小企業学会の会長に推薦し、中小企業研究者が、自由に発言し、研究を進展させる場となるように副会長として尽力したいと考えていました。高田さんとは、研究所時代に一緒に調査をしてきたこともあり、また、「兵庫県大規模店舗審議会」のメンバーとして共に活動してきた経緯もあります。そのため、気心もよく知っていました。私はそのような高田さんを西部部会の他の会員と共に支えてきたつもりです。元々、中小企業学会の西部部会と東部部会は、成り立ちも含めて、少しカラーが異なっていると考えています²⁹。東部部会は首都圏に立地している全国一の大学数を背景

に、優秀な中小企業研究者が多数おられる。その意味で、方法論や研究方法も異なり、多様性に富んでいると思う。また、行政機関も東京に多数立地しており、それが



メリットであるとともに、少し、腰を落ち着けて研究するにはデメリットにもなるのではと考えています。他方で、西部部会は、東京の騒がしさから、やや距離を置いており、その静かさから、研究も雑音が入らずに、地道に落ち着いて研究ができるのではないかと推測しています。今後も、若手研究者は所属する大学の立地に依拠した地理的な違いによるメリットとデメリットを見据えて、研究を深める必要があると言えます。

8 若手研究者に対するメッセージ

藤川 先生の指導の下で学部生が商工総合研究所の中小企業懸賞論文に入賞していますし、社会人院生を含む沢山の院生が修士号や博士号を取得しています。それを踏まえて、若手の中小企業研究者に対して研究や教育を進めていく上でのメッセージを頂ければと思います。

太田 まず、私が行ってきた学部生の中小企業懸賞論文の指導では、慶應義塾大学、青山学院大学、同志社大学で行ってきた3大学合同のKADの果たした役割が大きい。KADでは、それぞれの大学の校風の違いもあり、互いに高め

合いながら切磋琢磨できたと信じています。また、渡辺さん、港徹雄³⁰さん、私のキャラクターの違いも、結果的にハーモニーをもたらしたものと感じています。私だけではなく、学生にとって

も良き思い出を残せたのではないのでしょうか。また、社会人大学院生の指導に関しては、業界の最新の情報などの私の知らないことをよく知っていて、逆に教わったことも多かったです。これらの取り組みから感じたことを述べますと、一方の教育面として、若手の研究者の方は、多様な学生の個性や人格を教員として尊重する姿勢が必要だと思います。それと共に、社会的常識を教育することも教員の役割として求められています。この辺のバランスを取ることは難しいのですが、自分が研究者であると同時に人を育てる教育者であることを強く自覚してもらいたい。他方の研究面では、古典の経済学や経営学の基礎をきちんと勉強した上で、学際的な学問領域にも積極的にチャレンジして欲しい。それは私が竹林先生から相対性理論や素粒子論などの幅広い領域の本を読まされ、結果的に中小企業のIT化の研究に繋がったように、何が研究上の問題関心に繋がるのかわからない。それに加え、これからの若手の研究者には、嫌がらずに新しい事象に対する研究にも貪欲に取り組んでももらいたい。最後になりますが、教

30 港 徹雄（みなど てつお：1945～）青山学院大学名誉教授。日本中小企業学会第8期会長。

育者や研究者は、時にユーモアが求められる場面もあると考えています。若手の研究者には、このようなユーモアも持って欲しいですね。私が現役の時に、濱田康行³¹さんに依頼され、サッチャー内閣のブレインの一人であり、ボルトン委員会報告書で中心的な役割を果たしたG. バノック³²を同志社大学の講演会にお招きしたことがあります。そこで、私はバノックに「Knock, knock, whose knock, Bannock knock」という

ダジャレを言いました。バノックとノックを掛けたもので、本人がニヤッと笑っていたのを今でも記憶しています。これをきっかけとして、彼との距離が縮まったとも感じました。ダジャレも国際的なコミュニケーションを取るための重要なツールの1つだと思いませんか。

藤川 本日は長時間にわたり、どうもありがとうございました。

〈インタビュアー略歴〉

藤川 健（ふじかわ たけし）

1979年生まれ。兵庫県立大学国際商経学部准教授、博士（商学）。

2007年同志社大学大学院商学研究科商学専攻博士後期課程単位取得退学。

指導教授は太田進一同志社大学名誉教授。

専攻は、中小企業論、中小企業経営論。

31 濱田康行（はまだ やすゆき：1948～）北海道大学名誉教授。

32 G. バノック（Graham Bannock）。なお、1971年にボルトン委員会が発表した報告書『*Small Firms: Report of the Committee of Inquiry on Small Firms*』は、1974年に商工組合中央金庫調査部から『英国の中小企業—ボルトン委員会報告書—』として翻訳・出版されている。